Japanese association of educational psychology

発　達　L-4

幼稚園から小学校への移行に関する研究　II

小林　小夜子　　進野　智子
（玉木女子短期大学）　（長崎大学教育学部）

目的：幼稚園から小学校への移行に関して幼児・児童やその親を対象とした研究には,Ladd & Price (1987), Ladd(1990)および飯島（1990）がある。しかし、これらの研究においては、研究対象は幼児・児童およびその母親に限られており、幼児・児童の教師の側からの検討はなされていない。本研究においては、幼稚園から小学校へと移行する幼児・児童を教師がどのように捉えているかについて明らかにすることを目的とする。

今回の発表は、本調査用の質問項目を確立するための基礎的調査に関するものであり、次の３点について検討することを目的とする。すなわち、幼稚園教師（以下、園教師と略）および小学校教師（以下、校教師と略）に対して同一の質問紙による回答を求めることにより、①担任教師による園児・児童の捉え方の相違②幼稚園教育に対する園教師と校教師の捉え方の相違③園教師の校教師に対する要望および校教師の園教師に対する要望について検討する。

方法：　*対象*幼稚園年長児クラス担任教師９名（女性９名。21 歳～ 30 歳、平均 25.9 歳）および小学校１年担任教師 11 名（男性４名、女性７名。23 歳～ 59 歳、平均 39.2 歳)。この中、幼稚園年長児担任教師２名による園児 61 名の評定、小学校１年担任教師１名による児童 34 名の評定。

*手続き*質問紙による調査。

*質問項目*本質問紙は次の項目から構成されている。①担任クラスの園児・児童の全般的印象に関しては、柏木（1988）の「教師による幼児の行動評定尺度」を使用。②園教師と校教師による幼稚園教育に対する捉え方に関しては、飯島（1990）の母親に対する質問項目の中、質問３（幼稚園教育に関する認識）および質問５の項目の一部（幼稚園から小学校への適応に要する期間）に回答者の教育歴を付加したものを使用。③自由記述により園教師から校教師に対する要望および校教師から園教師にたいする要望を求めた。

調査時期　1997 年 12 月。

結果と考察：本稿には、結果の中、②と③のみ報告する。

幼稚園から小学校への移行に関に関して、小学校への適応に要する期間の長さについて５段階評価で求めたところ、校・園の教師の認識に有意差は認められず、両者とも「比較的すぐに慣れると思う」と回答している。母親を対象に調査した飯島（1990）の結果と比較すると、園児の聞き取りの必要があると思われる。

さらに、幼稚園教育に対する園教師と校教師の認識に関して、４段階評価による評定を求めたところ、校・園の教師が評価点 3.5 以上で共通して重要だと思っている項目は、「のびのび生活をする」であり、評価点 1.55 以下で共通して重要でないと思っている項目は「文字・算数などの勉強」および「お稽古毎の教室がある」の２項目であった。

また、幼稚園教育に対する認識に関して、校・園の教師間に有意差の見られた項目の中、園教師が校教師よりも重要と思っている項目は、「自主性を養う」・「遊び中心の生活」であり、校教師が園教師よりも重要と思っている項目は、「友だちが多い」・「協調性を重んじる」・「先生のいうことをよく聞く」の３項目であった。

③自由記述により園教師から校教師に対する要望および校教師から園教師に対する要望は、複数回答として集計された。この中、5 %水準で両者の間に有意差の見られた項目として、園教師が校教師に対して要望していることは、「個性の重視」・「幼稚園での自信を小学校で生かす」であり、校教師が園教師に要望することは、「集団生活の重視」・「基本的生活習慣のしつけ」・「規律正しさ」・「忍耐力」・「心の教育」であった。

③の教師の対園・対校に対する要望の結果は、②のそれぞれの校・園の教師が重要と思っている項目と重なる部分が多く、今後の分析・検討の余地が残されていると思われる。

NII-Electronic Library Service